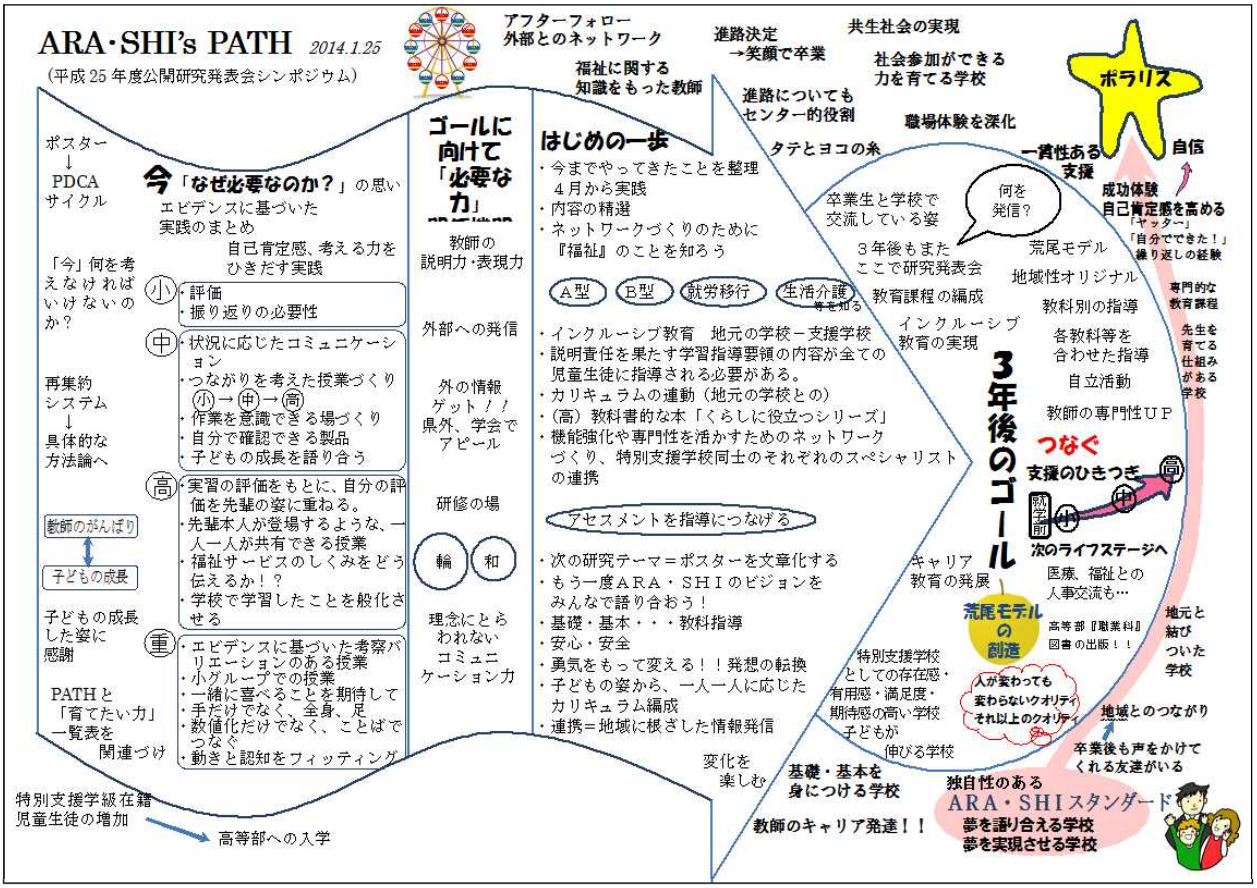
４　「ARA･SHI’s　PATH」

平成２５年度、キャリア教育を推進して３年目の区切りとして公開研究発表会を行い、そこで、今後のＡＲＡ・ＳＨＩ（荒尾支援学校）の未来を語るシンポジウムを開催しました。そこでは、「キャリア教育の目指す姿と荒尾支援学校の将来像～ＡＲＡ・ＳＨＩの夢を語る～」をテーマに、ブレーン・ストーミング法に基づくＰＡＴＨミーティングの方略でシンポジスト及びフロアの皆様と一体となって考えました。その成果物が「ＡＲＡ・ＳＨＩ’ｓ ＰＡＴＨ」です。このシンポジウムから、教師の思いは多様ですが、形は違うにせよ「子ども」を見つめる思いは同じで、その子どもを中心に据えた学校づくりが求められ、それを具現化する個々の児童生徒に応じたカリキュラム研究が不可欠なことが挙げられ、「３年後のゴール」を設定し、以後３年間の研究活動の方向性が示されました。



（1）　「ＡＲＡ・ＳＨＩ’ｓ　ＰＡＴＨ」はどれくらい達成されたか

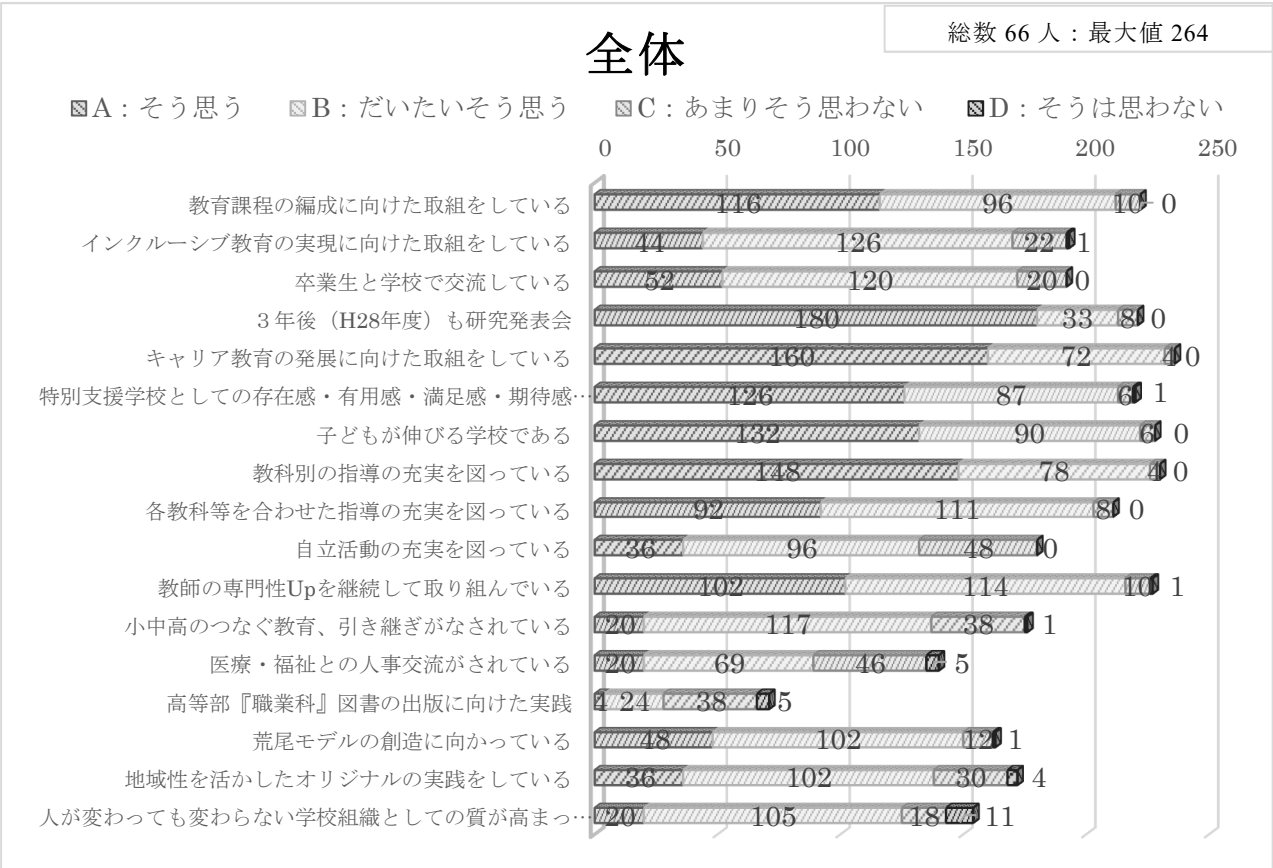
平成 25 年度公開研究発表会にて、ＰＡＴＨミーティングを用いたシンポジウムを実施した。外部参加者と校内教職員を含め 300 人を超える会場で未来の本校の姿と３年後である平成 28 年度のゴールを共有しました。

平成 26 年度より、学校全体と各学習グループでのゴールに向けて研究実践に取り組み、本年度 12 月に職員へのアンケートによる評価を行いました。また、この３年間、異動に伴い県内の支援学校に勤務している旧職員にも記述によるアンケートを依頼し、外から見た本校の評価も併せて行いました。なお、評価基準はＡ：そう思う（４ポイント）、Ｂ：だいたいそう思う（３ポイント）、Ｃ:あまりそう思わない（２ポイント）、そうは思わない（１ポイント）、分からない（０ポイント）とし、数値と人数の合計値で算出しています。

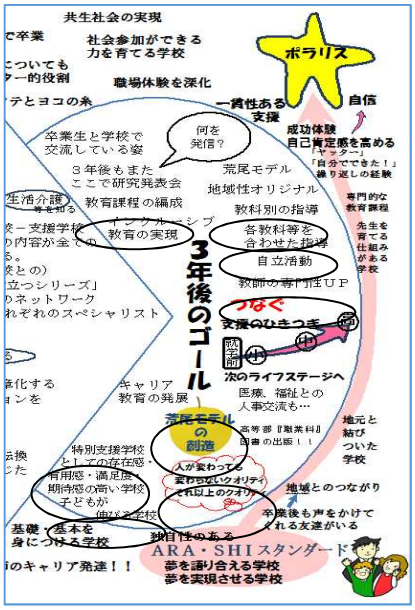
ア　３年後のゴール項目（全１７項目）

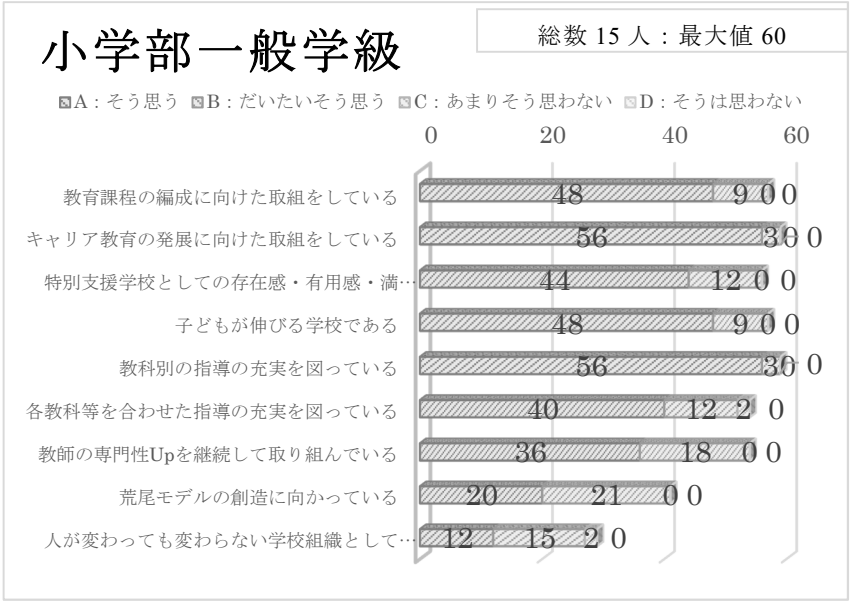
1	教育課程の編成に向けた取組をしている	10	自立活動の充実を図っている
2	インクルーシブ教育の実現に向けた取組をしている	11	教師の専門性 Up を継続して取り組んでいる
3	卒業生と学校で交流している	12	小中高のつなぐ教育、引き継ぎがなされている
4	３年後（H28 年度）も研究発表会	13	医療・福祉との人事交流がされている
5	キャリア教育の発展に向けた取組をしている	14	高等部『職業科』図書の出版に向けた実践
6	特別支援学校としての存在感・有用感・満足感・期待感の高い学校	15	荒尾モデルの創造に向かっている
7	子どもが伸びる学校である	16	地域性を活かしたオリジナルの実践をしている
8	教科別の指導の充実を図っている	17	人が変わっても変わらない学校組織としての質が高まっている
9	各教科等を合わせた指導の充実を図っている		

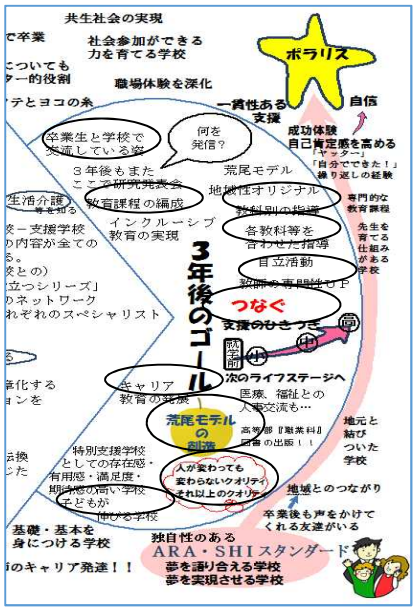
イ　全体結果

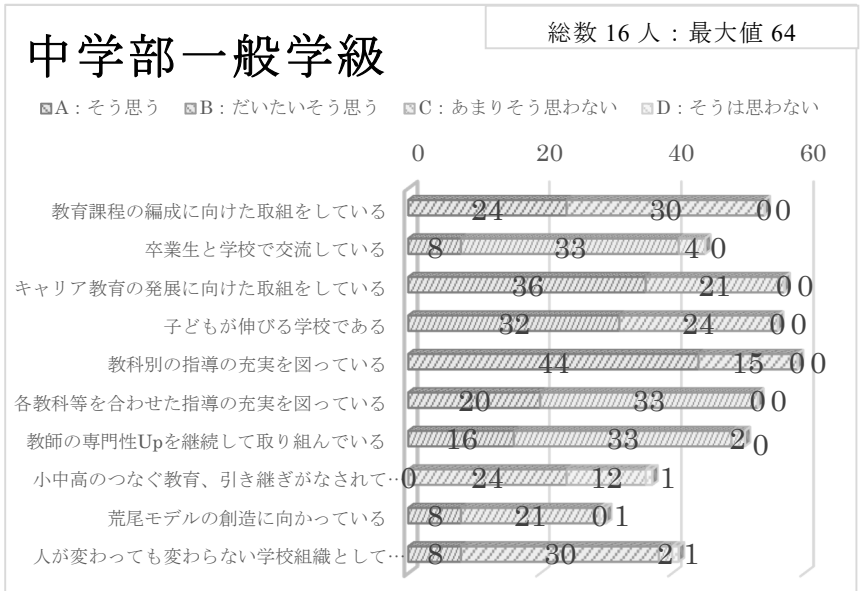


ウ　各学習グループ結果

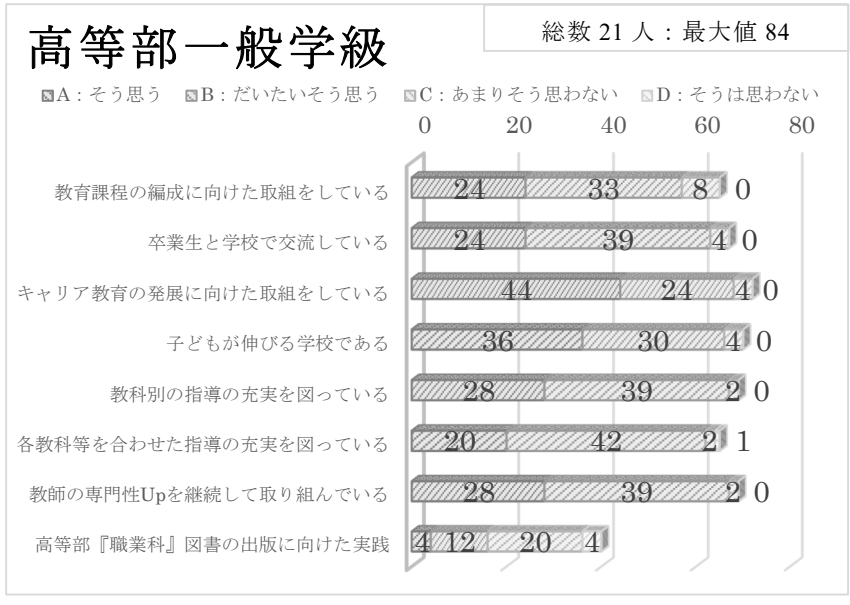

共生社会の実現
社会参加ができる
力を育てる学校
ポラリス
職場体験を深化
一貫性ある
支援
自信
成功体験
自己肯定感を高める
何を
発信？
荒尾モデル
地域性オリジナル
教育課程の編成
インクルーシブ
教育の実現
教科別の指導
各教科等を
合わせた指導
自立活動
教師の専門性UP
3年後のゴール
つなぐ
支援のひきつぎ
次のライフステージへ
医療、福祉との
人事交流も…
キャリア
教育の発展
荒尾モデル
の
創造
地元と
結びついた
学校
地域とのつながり
卒業後も声をかけて
くれる友達がいる
独自性のある
ARA・SHIスタンダード
夢を語り合える学校
夢を実現させる学校

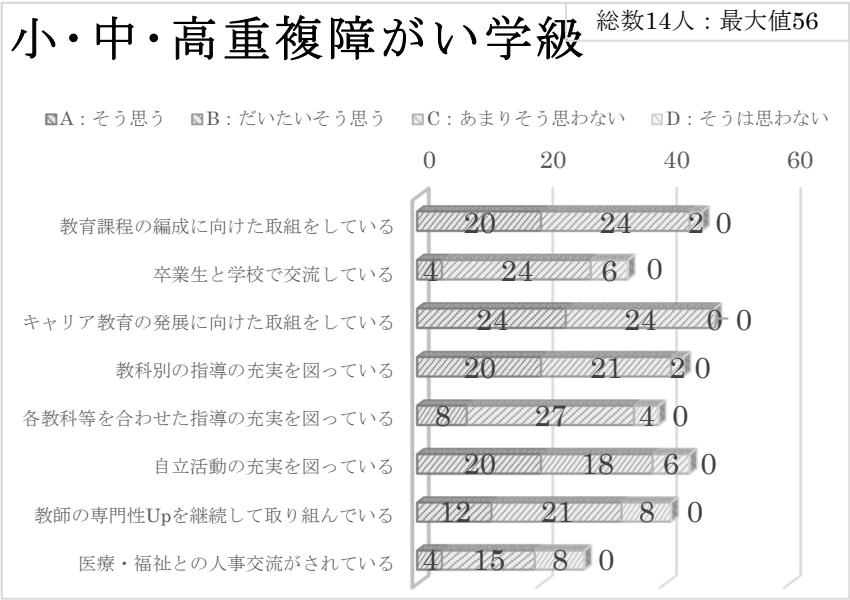

小学部一般学級
総数 15 人：最大値 60
A：そう思う　B：だいたいそう思う　C：あまりそう思わない　D：そうは思わない
0　20　40　60
教育課程の編成に向けた取組をしている　48　9　0　0
キャリア教育の発展に向けた取組をしている　56　3　0　0
特別支援学校としての存在感・有用感・満…　44　12　0　0
子どもが伸びる学校である　48　9　0　0
教科別の指導の充実を図っている　56　3　0　0
各教科等を合わせた指導の充実を図っている　40　12　2　0
教師の専門性Upを継続して取り組んでいる　36　18　0　0
荒尾モデルの創造に向かっている　20　21　0　0
人が変わっても変わらない学校組織として…　12　15　2　0


共生社会の実現
社会参加ができる
力を育てる学校
ポラリス
職場体験を深化
一貫性ある
支援
自信
成功体験
自己肯定感を高める
何を
発信？
荒尾モデル
地域性オリジナル
教育課程の編成
インクルーシブ
教育の実現
教科別の指導
各教科等を
合わせた指導
自立活動
教師の専門性UP
3年後のゴール
つなぐ
支援のひきつぎ
次のライフステージへ
医療、福祉との
人事交流も…
キャリア
教育の発展
荒尾モデル
の
創造
地元と
結びついた
学校
地域とのつながり
卒業後も声をかけて
くれる友達がいる
独自性のある
ARA・SHIスタンダード
夢を語り合える学校
夢を実現させる学校


中学部一般学級
総数 16 人：最大値 64
A：そう思う　B：だいたいそう思う　C：あまりそう思わない　D：そうは思わない
0　20　40　60
教育課程の編成に向けた取組をしている　24　30　0　0
卒業生と学校で交流している　8　33　4　0
キャリア教育の発展に向けた取組をしている　36　21　0　0
子どもが伸びる学校である　32　24　0　0
教科別の指導の充実を図っている　44　15　0　0
各教科等を合わせた指導の充実を図っている　20　33　0　0
教師の専門性Upを継続して取り組んでいる　16　33　2　0
小中高のつなぐ教育、引き継ぎがなされて…　0　24　12　1
荒尾モデルの創造に向かっている　8　21　0　1
人が変わっても変わらない学校組織として…　8　30　2　1

共生社会の実現
社会参加ができる
力を育てる学校
ポラリス
職場体験を深化
一貫性ある
支援
自信
成功体験
自己肯定感を高める
何を
発信？
荒尾モデル
地域性オリジナル
教育課程の編成
インクルーシブ
教育の実現
教科別の指導
各教科等を
合わせた指導
自立活動
教師の専門性UP
3年後のゴール
つなぐ
支援のひきつぎ
次のライフステージへ
医療、福祉との
人事交流も…
キャリア
教育の発展
荒尾モデル
の
創造
地元と
結びついた
学校
地域とのつながり
卒業後も声をかけて
くれる友達がいる
独自性のある
ARA・SHIスタンダード
夢を語り合える学校
夢を実現させる学校


高等部一般学級
総数 21 人：最大値 84
A：そう思う　B：だいたいそう思う　C：あまりそう思わない　D：そうは思わない
0　20　40　60　80
教育課程の編成に向けた取組をしている　24　33　8　0
卒業生と学校で交流している　24　39　4　0
キャリア教育の発展に向けた取組をしている　44　24　4　0
子どもが伸びる学校である　36　30　4　0
教科別の指導の充実を図っている　28　39　2　0
各教科等を合わせた指導の充実を図っている　20　42　2　1
教師の専門性Upを継続して取り組んでいる　28　39　2　0
高等部『職業科』図書の出版に向けた実践　4　12　20　4



エ　旧職員の意見

先生方はARA•SHIに誇りをもっていて、「夢を語り合える学校、夢を実現させる学校」という大きなポラリスに向かっていると思います。「はじめの一歩」にある項目を再度確認していくとより強固なものになると思います。

「なぜ」「なんのために」といった学習の根拠、説明責任が果たされていると思います。○スタイルによる具体的な指導計画があり、一貫性や系統性のある学習指導ができていると思います。

3年後のゴールを共有し、全職員で研究に取り組めるような校内研修を充実させたことで、着実に教師の専門性が向上していると思います。今後は集団での学習における客観的な評価の在り方を検討していただきたいです。

これまでの「キャリア教育」を核にした実践研究は、次期学習指導要領と通ずるものがあり、意義のある研究だったと思う。今後は各教科別の指導と合わせた指導がバランス良く成り立つことを望みます。

「育てたい力」を軸とした一貫性のある教育実践をされていると感じています。個別の教育支援計画や個別の指導計画などともリンクしていて指導しやすいと思います。

組織としては非常に高い一体感を感じていました。若手教師に熱意と活気があり、校外研修も積極的に参加している。ただ、毎年の異動が多い中、核となっている先生が抜けた後の体制づくりが心配です。

オ　考察

アンケート結果で示されたとおり、ゴールを達成できたと思われる項目は多数上がっています。その中でも、教育課程の編成やキャリア教育の発展、教科別の指導の充実は高い評価を得ることができました。ＡＲＡ・ＳＨＩの教育プログラムの構築に向けたこれまでの３年間の実践研究が実を結びました。

その発端として、「ＡＲＡ・ＳＨＩ’ｓ　ＰＡＴＨ」の作成過程における、「今の姿」及び「必要な力」、そして「はじめの一歩」についても共有したことが大きいと思われます。「今の姿」により平成 25 年度までの全体研究と各学習グループの課題を整理することができました。「必要な力」では文部科学省の各答申を押さえ、県外の最先端の実践的な研究を調査し、日本特殊教育学会での実践発表も積み上げてきました。また、大学及びスーパーティーチャーを講師にお迎えしての校内研修、県立教育センターとの教科型の共同研究そして学校改革プロジェクト支援事業モデル校、大手企業とのＩＣＴを活用した共同研究など、これまでの研究と修養の概念にとらわれないＡＲＡ・ＳＨＩ式研修スタイルを確立してきました。「はじめの一歩」では、優柔が利く特別支援教育において、コンプライアンスを果たす教育課程の編成を中心に据えたオーソドックスなスタイルを提示し、各学習グループの特徴に応じた幅のある実践研究につなげてきました。そして学校目標を達成するために「育てたい力」一覧表とリンクした諸々のツールを整理し、学校全体で同じベクトルで日々の実践に取り組むことができました。以上から、ＰＡＴＨによる研究の方向性を共有することの有用性は実証されましたが、達成できていない項目に関しての課題整理が必要です。

また、各学習グループを細かく見ると、３年後のゴールの結果にそれぞれ高い評価と低い評価が表れています。この３年間の実践を振り返り、各学習グループの特徴を踏まえながら次年度への実践研究を“つなぐ”ことが必要です。

旧職員からは、本校のこれまでの教育実践への高い評価と、今後の研究推進に向けたヒントを得ることができました。ただ、記載以外の意見で、勤務時間超過や校務の偏りへの課題が示唆されています。学校改革プロジェクトの成果もあり、校務改革は進んでいるものの、一人一人の負担数はそれほど減っているのではなく、一部の職員への校務の偏りは否めません。負担数は多いがそれを「負担感」と捉えず、「やりがい」として昇華している現状です。人事異動により組織は年々変化する中、人が変わっても組織は変わらないシステムを継続していくには、セカンドステージとしてＡＲＡ・ＳＨＩ’ｓ　ＰＡＴＨの第二幕を作成する必要があります。